

『維摩經文疏』所引の『維摩詰所説經』

山口弘江

『維摩經文疏』二十八卷（以下『文疏』）とは、天台大師智顗が晋王広（後の隋の煬帝）の求めに応じて献上した、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』三卷（以下『維摩經』）の注釈書である。ただし、口授の途中で智顗が示寂したため、直接的な智顗の随文解釈が展開されるのは卷第二十五の仏道品の釈までであり、卷第二十六以降は、後に弟子の章安灌頂が補い完成させているため、一口にこれを智顗撰とすることは厳密さを欠く。

さて、この『文疏』は經文と釈文が交互に配される会本形式であり、読者の便が図られている。ただし、江戸時代宝暦十一年（一七六一）に付された序文及び凡例によると、版本の元となった興福寺で発見された写本では、もともと会本だったのは智顗の卷第二十五までであり、灌頂の補遺の卷第二十六以降では經文が付されていなかったため、開版にあたり宋本に基づき挿入したことが知られる¹⁾。また、卷第二十八の識語によると、その写本は法華寺、天宮寺、清泰寺といった唐代の天台教団において重要な役割を担う寺院の系統を受け

て、六九二年にまで遡ることができる。したがって、この文獻は晋王に献上した本に極めて近い形態を保っていると考えられる。筆者は、このような『文疏』の成立と流伝の背景から、そこに付された『維摩經』は、献上当初から釈とともに文中に挿入されたものであったと推定する。

このことは二つの重要な意味を持つこととなろう。第二に、隋代の『維摩經』の実態を伝える一資料としての価値である。これについては、木村宣彰氏によって、弘始八年（四〇六）訳とされる現行の『維摩經』の前に訳出された『毘摩羅詰提經』と称される草稿本の存在し、嘉祥大師吉藏は両本を参照していたとする指摘と併せて、検討すべき課題となる²⁾。第二に、実際に読誦された經文が挿入されているとすれば、釈との相關関係から智顗の『維摩經』理解の特質を見出すことが可能となる点である。

注釈書所引の經文を抽出し諸本と対校するという手法は、藤田宏達博士による『觀無量壽經』の研究に先蹤がある³⁾。本

研究の目的は、『文疏』研究の文献学的基礎として、挿入された経文と、一般に使用される大正蔵本との相違点を明確に把握することにある。これらが、誤写や異説と単純に排除される危険を避けるため、単に両書を比較するのではなく、重要な諸本との対照を加えることで、より客観的な判断基準を設けることとした。

さて、本研究が用いた方法について述べておきたい。まず、調査の対象は、写本の段階から会本形式であった仏道品第八までの経文と限定した。『文疏』と『維摩經』の大正蔵本、それから大正蔵よりも詳細な校勘記がある北京版中華大蔵經によつて、諸本、特に各種大蔵經所収本との大まかな異同を確認した。⁽⁴⁾次に、その他に、隋唐代の『維摩經』の語彙の傾向を見極めるために、特に唐代以前に書写された資料を収集し、参照することに努めた。使用した資料は次の通りである。

○『文疏』

《天》…大日本統蔵經 第一套第二七、二八冊所収本

○『維摩經』

《大》…大正新脩大蔵經第一四卷所収

《高》…高麗大蔵經第九卷所収（再雕本、卷上は一二四二年、卷中は一二四三年）

《中》…中華大蔵經（北京版）第一五冊所収（卷上は高麗蔵を転載。

卷中・下は金蔵広勝寺本。一二世紀中頃）

『維摩經文疏』所引の『維摩詰所説經』（山口）

《房A》…房山石經、隋唐刻經第一冊二「維摩詰經」（初唐）

《房B》…房山石經、隋唐刻經第三冊一三六「維摩詰所説經」（八三六年）

《聖上甲》…聖語蔵、第三類天平十二年御願經第四八号No.324「維摩詰所説經卷上」甲聖語蔵

《聖上乙》…聖語蔵、同No.325「維摩詰所説經卷上」乙聖語蔵

《聖中》…聖語蔵、同No.326「維摩詰所説經卷中」（以上三本は、天平十二年（七四〇）書写）

《上図書〇三五》…敦煌本上海圖書館蔵〇三五（八二四四一）、上海圖書館蔵敦煌吐魯番文獻 第一冊（卷上、弟子品第三の途中から卷末まで。北魏、神龜元年（五一八）の識語）

《S3394》…敦煌本S.3394、「敦煌寶蔵」二八冊（卷中、觀衆生品第七から卷末まで。永徽三年（六五二）の識語）

《S1864》…敦煌本S.1864、「敦煌寶蔵」一四冊（三卷を完備。甲戌年（七九四）の識語）

本稿では、紙面の都合上、調査の結果判明した『文疏』の経文の特色を示すもののうち、特に重要と思われる事例を報告する。

第一に次の三例は、『文疏』と一部の異本で興味深い一致が見られる例である。

「不見如来仏国嚴淨」《天》（正二八冊一二頁下三行）・《聖上甲》・《聖上乙》・《房A》・《房B》・《S1864》

『維摩經文疏』所引の『維摩詰所説經』（山口）

「不見如来_レ仏土_レ嚴淨」《大》（五三八頁下一行）・《高》

「不見如来_レ土_レ嚴淨」その他の宋版以降の大蔵經

ここでは三種類の語句が用いられる。唐代以前に書写された写本や石經では「仏国」の語が採用され、また『文疏』もその例に含まれることが注目される。

「非得果」《天》（卅二八冊九五頁下五行）・《聖上甲》・《聖上乙》・

《上図書〇三五》

「非得果非不得果」《大》（五四〇頁二六行）・《高》・《房A》・

《S1864》

この部分の經文は、「不見四諦、非不見諦。非得果。非凡夫、非離凡夫。非聖人、非不聖人」と対句が続く中、「非得果」に対する否定句が抜け落ちた形となっている。『文疏』では釈の中で、「經言非得果、有師解言、此恐脱落。類必有对。」と脱落と判断する他師の説を挙げているが、それに対して「今明非脱落。正是義也。」として、有師の説を採らない。

「善得」《天》（卅二八冊一八四頁下一三行ほか）・《聖上甲》・《上図書〇三五》

「善徳」《大》（五四三頁下一行）・《高》・《聖上乙》・《房A》・《房B》・《S1864》

仏伝に有名な Sudatta の訳語に対し、『文疏』「善得の善は善巧なることを表し、得とは理を得る、の意である」との語義を与えている。唐の孔穎達『礼記』の疏に、「徳とは理を

得るの称なり」という解釈があるように、中国古典一般に用いられる釈を依用し、「得」により積極的な意義を与える。また、聖徳太子撰とされる『維摩經義疏』でも「善得」として用いられている。

第二に『文疏』と大正蔵（高麗蔵）が一致するが、その他とは異なる例は、次の通りである。

「菩提心是菩薩淨土」《天》（卅二七冊九五三頁八行）・《大》（五三八頁中三行）・《高》

「發大乘心是菩薩淨土」《房A》

「大乘心是菩薩淨土」《聖上甲》・《聖上乙》・《房B》・《S1864》

『文疏』巻第七「大乘心者、即是四教大乘。四種菩薩發菩提心也。」（卅二七冊九五三頁上）と釈の中では「大乘心」としている点が注目される。『注維摩詰經』の会本の經文部分には「大乘心」とあるが、僧肇の注には「別本云、直心深心菩提心。」（大正蔵三八卷三三五頁下）という。一方、鳩摩羅什の釈の中では「大乘心」の語は用いられず、三心の浅深の過程を「直心誠実心也。發心之始、始於誠実。道識弥明、名為深心。深心増広、正趣仏慧、名菩提心。」（同頁下）と説く。この限りにおいて、羅什釈の意図する經文に「大乘心」の語が採用されていた要素は希薄である。「別本」については、木村宣彰氏の研究によつて羅什が弘始八年（四〇六）に訳出した現行の『維摩詰所説經』の前に訳出した草稿本の『毘摩羅詰提

『經』であることが指摘されている。この説に基づけば、草稿本の段階では「菩提心」であつた箇所を、弘始八年の訳本では「大乘心」に改められたということになる。これに『文疏』を対応させると、經文部分では草稿本を依用し、釈文では弘始八年訳本の語彙を採用したということになる。

第三に『文疏』のみの異読と判断でき、重要な意味を有する例は、次の二例が留意されよう。

『法自在菩薩』《天》(卅二冊九一頁下五行)・《聖上甲》

『法自在王菩薩』《大》(五三七頁中三行)・《高》・《聖上乙》・《房A》・《S1864》

『文疏』巻第四では「王」という菩薩に対しては、「定自在王菩薩：即得自在如国王也。」(卅二冊九一頁下)のように「王」であるのは王のようだと総括するのに対し、「法自在菩薩：於十法界一切諸法、自在也。」(同九二頁下)という「如王也」の定型句がない。したがって、『文疏』の場合は単なる誤脱ではないと判断できよう。

『大長者』《天》(卅二冊一九頁下七行)

『長者』《大》(五三九頁上八行)・《高》・《聖上甲》・《聖上乙》・

《房A》・《房B》・《S1864》

『法華經』譬喻品第三「舍利弗、若国邑聚落、有大長者」(大正蔵九卷一二頁中)に対応する『法華文句』の解釈では、この「大長者」に対し詳細な定義を与える。『維摩經文疏』

のこの箇所に対する解釈は、『法華文句』とほぼ同じである。

1 公遵親王『廣本淨名經疏序』「然寧樂古藏僅存一部。」(正統蔵二七冊八五七頁上)、守篤本純『新刻維摩經文疏序』「但懋文疏一部本山失傳、其僅存數卷、亦惟殘簡不足采覧。往歲雞頭慈瑗、揆得寧樂古藏、併荆溪記。」(同八五八頁上)、亮潤『刻淨名疏記序』「近横川鷄頭、慈瑗、特索諸南都興福。果獲全帙而還。靈空和尚一見、而喜遂使。」(正統蔵二八冊七一頁上)の記述によつて、湛然『維摩經疏記』とともに興福寺の經藏から発見されたことが知られる。

2 木村宣彰『注維摩經序說』(東本願寺出版部、一九九五年九月)。

3 藤田宏達『觀無量壽經講究——『觀經四帖疏』を参看して——』(真宗大谷派宗務所出版部、一九八五年七月)。

4 中華蔵には房山石經が校合に採用されているが、その異同の特色から、校合に採用されたのは八一九年の刻經であることが判明した。また大正蔵に付された聖語蔵の校異は、調査の結果、卷上に関しては、二つの写本から区別無しに異同を指摘したものであつたことが判明したため注意を要する。

〈キーワード〉 維摩詰所説經、維摩經文疏、毘摩羅詰提經

(駒澤大学大学院)

According to my research, the text does not seem to have been written by Zhanran.

23. Tiantai Zhiyi's conception of "li" (理)

Akihiro KASHIWAGURA

This thesis argues against the idea that "where there is principle (*li*) it is *dhātu-vāda*, and that is not Buddhism." As far as Zhiyi (智顗) is concerned, he does not perceive that principle exists separately from self. For him, there is no self that beholds principle, and no principle that is observed; principle is recognized in a state beyond existence and nonexistence. Zhiyi's concept is that principle is not with others but with oneself and becomes evident while living within the teachings of Buddha's way. From the above points, it is possible to argue that for Zhiyi, the principle is not a perception that basically exists, and it is not *dhātu-vāda*.

24. An Investigation of Problems Related to Inserts from the *Vimalakīrtinirdeśa* in the *Weimonjing wenshu*

Hiroe YAMAGUCHI

The 28 scrolls that comprise the *Weimojing wenshu* 維摩經文疏 are one of the most important commentaries on the *Vimalakīrtinirdeśa* 維摩詰所說經 as translated by Kumārajīva 鳩摩羅什. Tiantai Zhiyi 天台智顗 completed his commentary of the sūtra's first eight chapters as far as the 25th scroll before his death, and the remaining three scrolls were subsequently completed by his disciple Guanding 灌頂. In these subsequent commentaries, sentences from the original sūtra are inserted.

According to the notes, the first 25 scrolls had been accurately preserved with the sūtra inserts intact. I can surmise with a reasonable certainty that they preserve Zhiyi's sūtra inserts very closely.

Problems do remain, however. There are many small differences between the *Weimonjing wenshu*'s sūtra inserts and the sūtra itself as it appears in the

Taishō Canon vol.14. Therefore, in this paper I have researched the *Vimalakīrtinirdeśa* text dated close to the time of Zhiyi, as far as the eighth chapter. On the basis of this research, I was able to point out areas with particular relevance to Zhiyi.

25. Songyuan Chongyue: His Biography and Thought

Shūdō ISHII

In this article I have re-examined the stūpa inscription for Songyuan Chongyue (松源崇岳), which was written by Lu You (陸游) and included in his *Weinan Anthology*. According to the inscription, Songyuan was enlightened upon hearing Mi'an Xianjie's (密庵咸傑) instructions on Muan Anyong's (木庵安永) phrase, "opening one's mouth is not on the tongue." Muan Anyong was a second-generation successor to Dahui (大慧). Afterward, this phrase came to represent Songyuan's teaching. The phrase's meaning is examined on the basis of two of his general lectures (普說), in which both the experience of great enlightenment based on the kōan and having an encounter with a good Zen master are important. Thus this kōan becomes referred to as "a single kōan that exhausts the great earth" and "the kōan of the immediate manifestation of one's original allotment."

26. Shenhui's (神會) Bodhisattva-śīla Thought

Shirō NAKAJIMA

Parallelisms between the early stage of Chan Buddhism (禪宗) and the Mahāyāna-Bodhisattva-śīla Movement (大乘菩薩戒運動) have been pointed out. Northern Song Chan's (北宗) *Wushen Fangbian men* (『無生方便門』), Shenhui's *Platform-Words* (『壇語』), the *Lidai fabao ji* and the *Dunhuang Platform Sūtra of the Sixth Patriarch* (敦煌本『六祖壇經』) "Mind-ground-Formless-śīla (心地無相戒)" record the giving and receiving of the Mahāyāna-Bodhisattva-Cīla according to the rites prescribed in the *Fanwang jing* (『梵網經』) since the Fourth Patriarch Daoxin (四祖道信). That Shenhui's *Plat-*